

# ビザンツ支配、セルジューク朝侵入、そして十字軍到来の狭間で—アルメニア語史料『アブドルムセフとその子孫たちの歴史』訳註(2)

仲 田 公 輔

## 1. はじめに

本稿は、10世紀のアルメニア語史料であるトヴマ・アルツルニ『アルツルニ家の歴史』に12世紀頃に付された、逸名著者による続編の一つ、「アルメニアで起こった出来事について、そして神を愛する君侯アブドルムセフとその子孫たちについて」（本稿では便宜的に『アブドルムセフとその子孫たちの歴史』と呼ぶことにする）を訳出し、註解を付したものである。

この史料の性質や背景となる歴史的状況については前巻『岡山大学文学部紀要』77巻（2024年）、53-64頁に掲載された「ビザンツ支配、セルジューク朝侵入、そして十字軍到来の狭間で—アルメニア語史料『アブドルムセフとその子孫たちの歴史』訳註(1)」（以下「訳註(1)」とする）で既に述べているため、そちらを参照されたい。今回扱う後半部は、アブドルムセフの妻マリウムと、彼らの間に生まれた子どもたち、とくに、アルメニア人たちが移住したキリキアで成立しつつあったカトリコス座に対抗し、1113年にヴァスプラカン地域のアグタマル島のカトリコスとなったダウィトと、アミウクの城塞の君主となったアルズらについての記述が中心となる<sup>1</sup>。

「訳註(1)」でも触れたように10-11世紀に独立王国を失ったアルメニア人たちは、アナトリア東南部のキリキアへの移住を進め、やがて12世紀までに王国を形成するヘトゥム家とルベン家の君主たちが率いる政治勢力と、パフラヴニ家が輩出する教会の指導者たるカトリコスの座が確立していくことになる<sup>2</sup>。

しかし、過渡期であった11世紀から12世紀前半にかけては、キリキアのカトリコスは盤石とは言いがたかった。今回訳出する部分ではアルメニア本土のヴァスプラカン地域にとどまっ

---

1 アブドルムセフ一族については、R. H. Hewsen, 'Artsrunid House of Sefedinian: Survival of A Princely Dynasty in Ecclesiastical Guise', *Journal of the Society for Armenian Studies* 1 (1984), pp. 123-137を参照。アグタマル島のカトリコス座については、V. Vardanyan, 'Alt'amari Kat'olikosut'yan Himnadraran šurj', *Patma-Banasirakan Handēs* 2 [70] (2010), pp. 70-80; 浜田華練『一なるキリスト・一なる教会：ビザンツと十字軍の狭間のアルメニア教会神学』（知泉書館、2022年）、45頁を参照。

2 A. A. Bournoutian, 'Cilician Armenia', in *The Armenian People from Ancient to Modern Times*, vol. I, *The Dynastic Periods: From Antiquity to the Fourteenth Century*, ed. R. G. Hovannisian (New York, 1997), pp. 273-291; ジョージ・ブルヌティアン(小牧昌平監訳、渡辺大作訳)『アルメニア人の歴史：古代から現代まで』（藤原書店、2016年）、144-162頁; 浜田『一なるキリスト・一なる教会』、21-30頁; 櫻井康人『十字軍国家』（筑摩書房、2023年）、230-250頁。

たアブドルムセフ一族もまた、結果的には広域に影響を及ぼすことはできなかったものの、キリキアに対抗してアルメニア人を導く立場となるべく、カトリコスを立て、その系譜を正当化しようとしていたことがうかがえる。その正当化の論理も、キリキアで行われていたパフラヴニ家によるカトリコス座の確立の中で唱えられたものと類似点が見られる。

訳出に使用したテキストは、「訳註(1)」と同じく『アルメニア古典著作集成 (*Matenagirk' Hayoc'*)』所収のものである<sup>3</sup>。また、必要に応じてR・トムソンによる英訳及び註釈を参照した<sup>4</sup>。

## 2. 訳文と訳註

[MH300] [T373]<sup>5</sup>さて、マリアムという名のそのキリストの聖なる子羊は<sup>6</sup>、[アルメニアの]民族における女王のなかの女王<sup>7</sup>であった。彼女は聖性と敬神と主への畏怖をもって育てられ、神への愛においてその名<sup>8</sup>に似つかわしく、あらゆる聖人より優れて、あらゆる者を憐れみ、慈悲深く、確固たる信仰を持ち、聡く思慮深く、聖なる女王たちに劣るところはなかった。彼女は祈りを愛し、貧しいものを愛した。彼女は常に神聖なる聖職者たちに奉仕した。彼らは神聖なる聖堂、即ち神聖に装飾された神の教会、誉れ高く名にし負う聖十字架教会<sup>9</sup>にいた。なぜなら神はそこを選び、その中に住まうことを良しとされたからであり、彼女は安置所に以下の神聖な宝物を納めた。我らの神聖なる啓蒙者、パルティアのグリゴル<sup>10</sup>の座、神聖な秘跡のための聖別された祭壇、神聖な腰帯、主の民を導いた、偉大な預言者モヴセスとアハロンの

3 T'ovma Arcruni, *Patmut'wn tann Arcrunec'*, ed. G. Manukean, *Matenagirk' Hayoc'*, vol. 15 (Antelias, 2012).

4 R. Thomson (trans. and comm.), *History of the House of Atsrunik'* (Detroit, 1985).

5 [MH]は『アルメニア古典著作集成』のページ数、[T]はトムソンによる英語訳のページ数を指す。

6 Ačarean, *Hayoc' anjanunneri bařaran* (Erevan, 1942-1962) (アルメニア人名辞典。以下AnjB), Mariam #22.

7 女王のなかの女王: Arm. *Tiknac' tikin*. *Tikin*は女王、王妃などを指す称号。*Tiknac' tikin*といった場合、特にサーサーン朝皇帝、「王の中の王」の皇妃に用いられた。N. G. Garsoian (trans. and comm.), *The Epic Histories (Buzandaran Pat'mut'wnk')* (Cambridge MA, 1989), p. 514, 564-565. Cf. エステル記1. 16.

この称号の使用やマリアムの事績の強調は注目に値する。アブドルムセフの子アルズは、息子ヘデネクをもうけており、妻帯していたことがおそらく確実だが、その存在はここでは明示されていない。「訳註(1)」で述べたように、マリアムはビザンツの有力軍人グリゴルや、「君侯の中の君侯」アルズの血を引くと主張されていたため、その系譜を強調するために詳述されているという側面はあるだろう。加えて、聖遺物の集積と庇護のような事業を通して、有力一族の女性成員が教会に大きく寄与している点は興味深い。

8 マリアムが聖母マリアと同名であることを指している。

9 ヴァン湖のアグタマル(アクダマル)島に現在も残る教会。アルツルニ家のヴァスブラカン王ガギク(在位908-943年)のもと建造された。詳細についてはL. Jones, *Between Islam and Byzantium: Aght'amar and the Visual Construction of Medieval Armenian Rulership* (Aldershot, 2007)を参照。

10 パルティアのグリゴルは4世紀初頭にアルメニアをキリスト教に導いた啓蒙者グリゴルのこと。彼は伝承ではパルティア系王朝であるアルシャク朝アルメニアの王ホスロヴの暗殺を試みた同じく王族のアナクの子だった。アナクの一族が誅殺された後、グリゴルはカッパドキアのキリスト教徒によって育てられ、長じて王となったホスロヴの子トルダトを改宗に導き、自身はカッパドキアのカイサレイアの教会で叙階を受けたと言われている。ブルヌティアン『アルメニア人の歴史』、84-85頁。

後で述べられるように、アブドルムセフ一族は、キリキア・アルメニアのカトリコスに対抗して独自のカトリコスを立て、聖グリゴルの継承者であることを主張していた。これらの聖遺物もその根拠となるものだったと考えられる。

二本の杖にもまさる、全能なる右手の杖、労苦をいとわぬ聖なる乙女フリプシメ<sup>11</sup>の履物、血染めの襟巻き、プロトクロバラテスと同族にして同名の若き神聖な殉教者アブドルムセフ<sup>12</sup>の腕、そして他の多くの[T374]殉教者たちの聖遺物。そして、その上に命を生む血が滴り落ちた、金と真珠をちりばめられた主の十字架の証。主はこれを、神聖にして祝福された総主教、大主教ダウイト殿を通して与え給うた。そしてこれは未だに、アパランクの聖なる証と呼ばれている<sup>13</sup>。なぜならダウイト<sup>14</sup>殿はプロトクロバラテスの同族であり、彼らは神聖にして主に選ばれた民であった。かつて聖霊がヴァスブラカンの家の監督者かつ守護者となるべく選んだのは、ヘデネクという名の偉大な君侯で、彼はセネケリム王の同族であり、アルツルニ王家の出自だった<sup>15</sup>。彼は君侯トルニクをもうけた。彼は力強い戦士であり、雄々しい行いに優れて勇敢であった。また彼の兄弟たち、神聖にして称賛に値する、祝福された勇敢な羊飼ひ、教会の冠であるダウイト殿とステパノス殿、そして我らの啓蒙者と同名のグリゴル殿をもうけた。彼らもまた、世界の中で諸天体のうちの太陽のごとく、世界の中で輝いた。トルニクから偉大な君侯タデオスが生まれた。彼は武働きにすぐれた男で、神の助力と自らの勇敢さによって、自分たちの地域が[MH301]絶え間ない敵の攻撃によって崩されることを許さなかった。タデオスの子トルニク<sup>16</sup>から神聖にして敬虔なアブドルムセフが生まれ、彼は父祖たちのすべてに、神の叡智を学ぶことにおいて卓越した。彼ら[父祖たち]は武勳にすぐれ勇猛果敢だったが、彼[アブドルムセフ]は学と聡明さに満ち、平和裏に彼の生涯を過ごした<sup>17</sup>。彼の時分には主の御言葉が成就した。それは「民族は民族に、王国は王国に対して起ち、あちこちで飢饉、疫病、自身が起こるだろう」「天では太陽と月と星に印が、地上では異教徒による騒擾があるだろう」というものである(マタイ24.7)。彼の時代には力強いフランクの民族がやってきて、[アルメニア暦]546年[=

11 アルメニア教会の女性聖人。「訳註(1)」、註(38)を参照。

12 サーサーン朝時代の殉教者とされる。彼は元の名をレヴィの子アセルといい、ユダヤ人の少年だったが、キリスト教徒の子どもたちによって洗礼を受け、父の怒りを買って殺された。彼の聖遺物は商人たちによってアルメニアに運ばれたとされているが、983年、ビザンツ帝国によってヴァスブラカン王国に贈られた聖遺物の中にも含まれている。J.-P. Mahé, 'Grégoire de Narek, Histoire de la Sainte Croix d'Aparank: Traduction commentée', *Revue des Études Arméniennes* 36(2014-2015), p. 114 n. 188.

13 アパランクの聖十字架は、983年にビザンツ皇帝バシレイオス2世(ただし実権はバシレイオス・レカペノスが握っていた)によってアルメニアに贈られた聖遺物である。アルツルニ家の王族隣席のもとでその到着は盛大に祝われ、アパランク修道院に奉納された。この聖遺物を所持していることは、アブドルムセフ一族がアルツルニ家の正当な継承者であることを主張する根拠となっただろう。ヴァスブラカンではそれまでも既に聖フリプシメがもたらした聖十字架が崇敬されていたが、敢えて新たにもたらされたビザンツ由来の聖十字架断片を崇敬することには、ビザンツ寄りの姿勢を示す意味があったと考えられる。仲田公輔「9-11世紀におけるビザンツ帝国からアルメニアへの聖十字架断片奉遷」『西洋中世研究』12(2020)119-121頁。

14 後に詳述されるが、アブドルムセフの子の一人である。

15 先行研究ではアブドルムセフ一族の先祖ヘデネクはガギク1世王の息子とされている。Hewsen, 'Artsrunid House of Sefedinian', p. 123; C. Toumanoff, *Manuel de généalogie et de chronologie pour l'histoire de la Caucasic chrétienne* (Roma, 1976), p. 91. しかし、実際はアルツルニ家との具体的な繋がりを示す根拠は存在しないように思える。ここで挙げているトゥマノフの家系図が当該箇所を他の箇所ですらうしているように実線ではなく、点線で繋いでいるのはそのためであろう。

16 このトルニクは殉教したとされている。「訳註(1)」、61頁参照。

17 軍事的エリート一族から知識人階級が輩出されるようになるというプロセスは、同時期にキリキア・アルメニアでカトリコスを輩出し始めたパフラヴニ家にも見られる現象である。浜田『一なるキリスト・一なる教会』、40-41頁。

西暦1097年]、聖なる街エルサレムと、他の多くの土地を異民族から解放した<sup>18</sup>。

[T375] 東の地は不信心者により、絶え間ない異民族の攻撃で苦しんだ。それは大地の表面を伝って洪水の流れが襲いかかるようであったし、あるいは分厚い雲が闇夜に嵐の轟音と雷の炎によって乱されるようでもあった。我らの逃避行は主の命の通りに、冬の土曜日に起こった。キリスト教徒の希望と期待は、偉大で勇敢な殉教者ヴァルタン・マミコニアン<sup>19</sup>の同族である、神を愛する選ばれし王家の血を引く王<sup>20</sup>プロトクロパラテス<sup>21</sup>において他にはなかった。なぜならば神聖なる父と同族たちの祈りと懇願を通じて、主は彼の塗油を強められたからである。彼は平和裏に生涯を送り、全ての人々に平和をもたらそうと尽力した。彼は税のために必要があれば財産や持ち物を差し出し、徴税人<sup>22</sup>が必要にかられて彼のものを取り立てていくのを咎めたりもしなかった。彼は統治を行うのに脅しを用いることはなく、恐喝や恫喝を行ったり、暴利を貪ったりもしなかった。むしろ父が子にそうするように、全ての者を気にかけて、宥め、憐れんだ。なぜなら彼は古の教えの一つを学んでいたからである。「同情的でありなさい、天におわす汝の父が同情的であるように(ルカ6.36)」。彼は7人の男子と5人の女子をもうけた。彼から生まれた子から、主は一人を選んだ。その名はダウイトで、ベツレヘムのエサイが息子たちのなかからダウイトを選んだのと同様だった。そして[主は]彼を永久に続く祝福をもって聖別した<sup>23</sup>。

---

18 第1回十字軍のこと。彼らが築いた十字軍軍国家は、キリキアのアルメニア人たちと密接な関係を築いていくことになる。

19 5世紀アルメニアの有力貴族。サーサーン朝皇帝ヤズデギルド2世のゾロアスター教改宗令(439年)に対してヴァルダナク戦争と呼ばれる反乱を起こした。緒戦を優位に進めたが、451年にアヴァライルの戦いで味方の裏切もあって敗死。アルメニア教会でもっとも重要な聖人の一人とされる。プルヌスティアン『アルメニア教会の歴史』100-103頁。

20 王家の血を引く王：Arm. *T'agaworazm ark'ayn. T'agawor, ark'ay*ともにアルメニア語では「王」を意味するが、その用法の詳細については、T. Greenwood, 'Representations of Rulership in Late Antique Armenia', in *The Good Christian Ruler in the First Millenium: Views from the Wider Mediterranean World in Conversation*, ed. H. Leppin, A. Hasse-Ungeheuer and P. Forness (Berlin and Boston, 2021), pp. 181-203.

21 プロトクロパラテスはアブドルムセフが名乗っていたビザンツの爵位。「訳註(1)」、註55参照。

22 税：Arm. *Hark*; 徴税人：Arm. *Harkapahanjot*。ここでの徴税人が誰によって任命されたものかは明示されていないが、後に触れるように、アブドルムセフ一族がムスリム勢力に恭順するのはその子アルズの代であるため、この時点ではまだビザンツに納税を行っていた可能性もあり得るだろう。

有力者による税の肩代わりは、ビザンツ皇帝バシレイオス2世(在位983-1025)が導入したアレングュオン制度を思わせるものがある。アレングュオンはロマノス3世アルギュロス(在位1028-1034)によって廃止されているが、11世紀末にも見られるという。Oxford Dictionary of Byzantium, ed. A. Kazhdan (New York, 1991), s.v. Allelengyon. ただし、制度に依らなくとも有力者による肩代わりなどは困難な状況で行われることはあり得る。

23 *AnjB, Dawit'*, #82. ダウイトは他の史料からも存在が確認できる。キラコス・ガンザケツイ、サムエル・アネツイやヴァルタン・アレヴェルツイによれば、1113年にパフラヴニ家のキリキアのカトリコス・バルセグ1世(在位1105-13年)が急死し、若干18歳のグリゴル3世が即位したのを好機とみたダウイトもアグタマルで即位した。晩年のバルセグがヴァスブラカンに滞在していたことや、かつてアルツルニ家のもとでヴァスブラカンに実質的な独立王国が形成されていたことがアグタマルのカトリコス正当化する拠り所となっていたと考えられる。Kirakos Ganjakeci, *Patmut'iw'n Hayoc'*, ed. K. A. Melik'Ohanjanyan (Erevan, 1961), 149; Samuēl Aneci, *Hawak'munk'i groc' patmagrac'*, ed. Tēr-Mik'eleian (Vataršapat, 1893), 124; Vardan Arewelc'i, *Hawak'umn Patmut'ean Vardanay Vardapeti* (Venice, 1862), 116 [trans. R. Thomson (1989), "The Historical Compilation of Vardan Arewelc'i", *Dumbarton Oaks Papers* 43, p. 201]; Hewsens, *Artsrunid House of Sefedian*, pp. 123-124; Vardanyan, 'Alt'amari Kat'olikosut'yan Himmadraran šurj'; 浜田『一なるキリスト・一なる教会』45頁。

彼は偉大なるダウイト<sup>24</sup>に似ていた。彼を上回ってすらいた。なぜなら主は彼の教会の角を高めることを望まれたからである。先に述べたように、[MH302]彼は神の住まうアグタマルの島の保管庫にある神聖な宝庫の加護のもとで育てられた。彼は主の神殿で育てられて祭司の長エリに取って代わることになった預言者サムエルに似ている。しかし彼は彼を上回っており、幼い頃より謙虚さの轡を持ち、断食、祈り、厳しい禁欲によって、勇猛果敢に忍耐力をもって悪魔と戦った。武器と鎧を装備し、飢えと渇きと寝ずの番によって狡猾な敵に打ち勝ったのである。これは天の街の人パウロの使徒的な箴言の言うとおりでである。[T376] 曰く、「我らには肉体や血との戦いはありません。そうではなく、支配、権威、この暗闇の征服者、天の下にいるこの悪との戦いがあるのです(エフェソ6.12)」。

彼は今や苦行と貞潔の実践を完了した<sup>25</sup>。なぜなら自身の生涯を貞潔のうちに送る者たちは天使にもまさるからである。彼は俗世やその名誉や今生の美しさを無と考へ、いつも預言者たちに耳を傾けた。肉体には硝子や揺れる花に似ているところがある。空虚なもの、移りゆくもの、日銭のための労働や軽薄さにも似ていると。彼は自身の生涯を、主が彼の聖人たちに命じた主の御言葉に即したあらゆる徳目の行いのうちに送った。曰く「あなたがたが私を選んだのではありません。私があなた方を選んだのです(ヨハネ15.16)」。

彼はメルキセデクに似ていた。[メルキセデクは]かつて命を生む御方の到来と血と肉の分配のために聖霊に選ばれ、父祖アブラハムが戦から戻ってきた際に、彼のもとへと[パンとワインを持って]走った。彼はヌンの子ヨシュアに似ていた。なぜなら彼は貞潔な聖人で勇敢で、その槍をもって約束の地で主の民の群れを導いたのである。彼はアーロンに似ていた。[アーロンは]12の真珠の宝石で飾られたエポデとローブを身に纏っていた。それは神聖な12使徒の数と、キリストを信じる12の民の種族を意味していた。彼は神を視た預言者エリヤに似ていた。[エリヤは]その母の子宮で天使の炎によって育てられ、貞潔によって3年と6月にわたって天を閉ざし、彼の口から言葉が出るまで大地に雨露が滴ることはなかった。彼は偉大な預言者であるザカリアの子ヨハネに似ていた。[ザカリアは]大天使より、ヨルダン川において神の言葉に手を置くことになるヨハネの誕生についての福音を聞いた。

[MH303]彼はゼベダイの子ヤコブに似ていた。彼はその[T377]貞節さをもって雷の子と呼ばれ(マルコ3.17)、高いところから神の言葉の雷を落とし、主の胸に依り(ヨハネ13.23)、火の中の金のごとく洗練された。56. 彼はその聖性と貞節において彼の似姿であり、極めて寛大な贈り手である神から彼に恩寵が与えられ、彼は司祭と主教と大主教とカトリコスの栄誉を授かった<sup>26</sup>。主は彼を我らの聖なる啓蒙者グリゴルの座に据え、最初の教父アリスタケス、ヴェルタネス、フシク、グリゴリス、ネルセス、サハクらの序列に加えた。なぜならばかつて聖霊は幻視によって聖サハクにアルメニアの国の不運が起こることを示した。即ち支配権の喪失、異民族への隷属、そして神の恩寵に背いたスルマクとシムエルのように真理に背くことである。

24 ダビデ王のこと。

25 聖職者として生涯独身で過ごしたことを意味する。

26 聖職者、主教、大主教：Arm. *zpatiw k'ahanayut'ean, ew zepiskoposut'ean ew zarhi episkoposut'ean*.

そして再び新たな幻視で、金字と、赤字で聖人たちの上昇と、黒字で一行半真理に背いたものが消されているのを書いた羊皮紙を示した<sup>27</sup>。それから別の金字の新たな行が、我らの総主教、神の榮譽を受けたダウイト殿、即ち神に選ばれて聖別され、我らの啓蒙者の座に据えられた御方の規範を示した。かつての聖人たちは彼らの父たちの似姿であった。そして彼もまた彼の父たち、総主教たちと殉教者たちに似ていた。なぜなら祈祷と祈願によって、また聖なる殉教者ヴァルトンと、彼らのそして聖なる総主教ダウイトの同族であるトルニクと彼らの血が注がれたことによって、主は彼をますます強めたからである<sup>28</sup>。

彼の子息たちの中の別の一人、兄弟の中で最も年少の者は、父からの家系から名をステパノスといい、母方の名前からは、彼の聖なる母、女王のなかの女王[マリウム]が、彼を祖父に因んでアルズと名付け<sup>29</sup>、彼の栄達に際して、神聖な王たちからの榮譽と偉大な名声を受け取っ

---

27 ここで提示されているのは、5-6世紀にアルシャク朝アルメニアの滅亡について記述したガザル(ラザル)・パルベツィの史書にも書かれている、聖サハクの幻視という逸話である。

本文中に登場するアリスタケス、ヴルタネス、グリゴリス、フシク、サハクは、啓蒙者グリゴルの血を引いており、アルバニアの主教だったグリゴリス以外は全員カトリコスだった。聖サハクはその最後の一人(在位387-428, 432-439)である。スルマク(在位428-429)とシムエル(在位432-437)は、ペルシアの差し金で聖サハクに代わってカトリコスに就任した人物たちである。Thomson, *History of the House of Artsrunik*, p. 377 n. 1.

ガザルによれば、聖サハクの幻視は、ペルシアが立てたカトリコスたちによってサハクがカトリコス位を追われている間に彼がアルメニア人たちに語ったものである。即ちガザルは、その後の歴史の展開を、サハクが既に幻視によって知っていたという形式で叙述しているのである。

ここでの羊皮紙はサハクが幻視したものの一つで、そこには金字で啓蒙者グリゴル統のカトリコスの名が、赤字は今後そのうち殉教することになる者の名が、そしてその間に黒字で書かれ消されて(かすれて)いる真理に背くカトリコスの名が書かれていたとされる。これらはそれぞれ、金字はサハク本人、赤字はヴァルダナク戦争のなかで落命することになるカトリコス・ヨヴセプ1世(在位440-451/2)、そして消された黒字はサハクに取って代わった親ペルシア派カトリコスたちを指していたという。

聖サハクの幻視は本来カトリコス座を追われた彼自身の再即位と、啓蒙者グリゴル統の復権を予言したものであったが、啓蒙者グリゴルの継承者を主張する人々によって、自分たちを予言したものとして再解釈されていった。ここでもダウイトがその系譜に連なるものとして解釈されている。11世紀のキリキア・アルメニアにおいても、カトリコスを輩出することになるパフラヴニ家が、自らを啓蒙者グリゴルの正当な後継者であることを主張するために引き合いに出していた。詳細については、浜田『一なるキリスト・一なる教会』、32-41頁。

同時期に別の地域で、新たなアルメニア人勢力の形成を図っていた人々が、同じ逸話を用いて正当化を図っていたという事実は興味深い。アグタマルのカトリコス座が、パフラヴニ家への対抗意識からこれを主張していた可能性もあるだろう。

28 ヴァルトン・マミコニアンとのつながりを強調しているのは、アグタマルのカトリコス座の全アルメニアの宗教的指導者としての正統性を強調することに加え、一族から殉教者が出たことを宗教的ステータスとして提示している可能性もある。殉教者を輩出した一族が高い宗教的求心力を持ち、政治的にも主導的役割を果たすという事例は、アルメニアでは何度かみられた。ヴァルトン殉教後、ペルシア支配下のアルメニアのマルズバン(総督)を輩出したマミコニアン家はもちろん、9世紀に王国を築いたバグラトゥニ家も、8世紀にムスリムとの戦いで殉教者を出したことにより他の有力一族の支持を集めたとされている。N. G. Garsoïan, 'The Arab Invasions and the Rise of the Bagratuni (640-884)', in *The Armenian People from Ancient to Modern Times*, vol. I, p. 142.

29 *AnjB*, Step'annos #95.

た<sup>30</sup>。彼は父方と母方の父祖の欠点を埋め合わせ、[T378]一族のうちで最も傑出した者となった。イサクがヤコブを祝福し、主が彼に耳を傾け、主がヤコブを彼の父の口を通して祝福した—なぜなら、父の祝福は子を支えるからである—ように、偉大な君侯アルズもまた神と彼の父アブドルムセフによって祝福された。なぜなら彼は神を愛し、敬虔で、生みの親に従順であった。というのも、彼は神の掟で「お前の父と母を敬いなさい(創世記28.1)」と教えられており、[MH304]また別のところで「従順でない子は破滅する(創世記49.26)」と聞いていたからである。彼は従順であり、あらゆる災厄から自由であった。主は彼を彼の父の座に定めた。ソロモンを彼の父ソロモンの座につけたように。また主は彼の王権を平穏なものにしたように、彼の支配も平穏なものとした。偉大で極めて聡明なクロパラテスのアブドルムセフは彼の父祖伝来の地を分割し<sup>31</sup>、彼の息子アルズの手で、天のようで難攻不落のアミウクの要塞を与えた。それに拠って彼は不敬虔なイスマエルの民に抵抗することができた。彼は叡智において彼の父達全員より優れていた。極めて高名で神を愛するクロパラテスのアブドルムセフは、平和裏に彼の人生を送り、彼の息子が誉れ高く称賛に値するものとなったのを見届けた。ある者については霊的・身体的豊かさに恵まれ、総主教座を継ぎ、神聖な規律に満ち、神を畏怖することに取り組んだのを見届けた。また一人については君主・君侯となり、名誉において傑出し、あらゆる行いにおいて幸運に恵まれて才気溢れるのを見届けた。他の男子・女子についても榮譽と名譽を見届けた。彼は彼の子らの子も見て、そして主に祝福された。そして彼は良き老齢で父とともに眠りにつき、同じ神の住まうアグタマル島の、聖十字架の近くに埋葬され、日々主から相応しく新たに子としてくださることによる解放を、彼に親しきアルメニア人のカトリコス・ダウィトによる神聖にして不死なる祈禱を通して受け取った。彼はそれを、神を愛する彼の両親の執り成しのために、絶え間なく捧げ続けた。アブドルムセフ王が身罷ったのは、アルメニア暦で570年<sup>32</sup>のことで、[T379]聖人を扶けた彼の妻は彼女の夫の死より2年長く生き、彼女も穏やかにキリストのもとに行き、彼女の父たちに加えられ、彼女もまた同じ墓に埋葬された。彼女は彼女の子らを神の恩寵に託した。

30 アブドルムセフは後述するように1121年に亡くなっているため、彼の子らが生まれたのは11世紀後半のことだと考えられる。

この2つの名を持つ子について、「ステパノス」は、先に挙げられたアブドルムセフの先祖の中に同名の人物が見られる。アルメニアの貴族が一族の中で同じ名前を繰り返す使用ということは珍しくない。他方、母方を通して命名された「アルズ」の名は注目に値する。「訳註(1)」ではこのアルズが、ブルガリア系有力者アルシアノスである可能性を指摘した。ブルガリアの王族に由来し、かつビザンツの有力者としても振る舞っていた人物のネームバリューが、11世紀においても一定の価値を持っていた可能性を示唆している。

31 ここで分割相続が行われていることは注目に値する。通常アルメニアでは一族の財産は男性成員によって分割せずに相続されるからである。

ユスティニアヌス帝(在位527-565年)はローマ領となったアルメニアにおいて、アルメニア人にローマ相続法を適用し、分割相続と女性の相続権を導入しようとしたことが知られており、これが財産の分散によるアルメニア貴族の基盤の弱体化を招いたとも言われている。N. Garsoïan, 'The Marzpanate (428-652)', in *The Armenian People from Ancient to Modern Times*, vol. I, pp. 103-107.

32 1121年2月から始まる年。Thomson, *History of the House of Artsrunik*, p. 378 n. 6.

彼らがこの世を去ったあと、ますます北風と激しく冷たい嵐が吹き始め、大地からは緑の木々が消えていった。主の寓話は成就した。「雨が降り、川が溢れ、風が吹く(マタイ7.25)」。それでも大きな信仰の岩、傑出した名誉ある君侯アルズを動かすことはできなかった。なぜなら彼はただ一人、アルメニアの国の中で、嵐で波のたつ海の中の船のごとく、王、君侯、有力者、父たちの誰からも助けも得ることなく、財産をなくし、持ち物を失いながらも、留まり続けたのである。

廃墟となった壁や建物が、以前は[MH305] 放置されていたのを、彼は多大な労力をもって再び修復した。なぜならば、主が言われたことが成就し、地上には悪しき日々が訪れたからである。「それは、これまでそのようなことがなかったような、困難の日々になるだろう(マタイ24.21)」。しかし彼の肩には、ヒゼキヤ王のごとく、天上からの助けにより、恩寵と知恵が助けにやってきて、彼が夜の時を正午に戻し、主の助けによって生き延びたように、彼もまた神の恩寵によって生き延び、知恵で満ち、彼は様々な手段で命を永らえ、不倶戴天の敵、即ちエリムの民と和解した。彼は彼らから贈り物と名誉を授かり、不信心者たちの目から見ても、彼の学識ある賢明さによって傑出した者となった。彼は富や財産を惜しむことはなく、快活な心で彼の労力をキリスト教徒の救済のために捧げ、異民族の税のために支払い、騎兵を編成して彼らに給金を与え、皆と和平を結んだ。「平和を求め、これを追え」(詩篇33.15/34.15)という言葉に従ったのである<sup>33</sup>。アルズは偉大なる父祖ノアに、方舟は彼の城に似ていた。なぜならノアは彼とともに選ばれた鹿や他の生き物を連れ、アルズは彼とともに、諸州の君子や貴族や貴族の子たち、有力者、君侯たちを連れて行ったからである<sup>34</sup>。彼は世界の中で、彼の騎兵たちとともに輝いた。まるで空の満ちた月のように、あるいは夏の日の太陽のように。[T380] 彼には神から聡明な男児、光の輝きたる先祖の名を帯びたヘデネクが与えられた。彼はその優雅な美しさにより、皆の目に喜ばしく、そして愛らしく映った。なぜなら彼の父である偉大な

33 即ち、アブドルムセフ一族はアルズの代になってムスリム王朝、おそらくシャー・アルメン朝に恭順し、軍事奉仕も行うようになった。これには12世紀の政治情勢が影響しているだろう。この時期、アルメニアでは北方のジョージアと、アフラトのシャー・アルメン朝が拡大し、他方でビザンツ帝国はマヌエル1世(在位1143-80)のアナトリア政策が頓挫した。それまではビザンツも意識しつつ様々な勢力の狭間で自立性を保とうとしていたアブドルムセフ一族のアルズも、旗色を明らかにする必要を迫られたのだろう。

シャー・アルメン朝支配下にあったと思しきアミウクだが、アルメニア語史料によると、その後アタベク政権の一つであるイルデニズ朝が1151年にシャー・アルメン朝に挑んで敗れた際、ヘデネクの支配するアミウクを占領することには成功し、その後60年間支配下に置いたという。Mxit'ar Ayrivanec'i, *Patmut'iw'n Hayoc'*, ed. M. Emin (Moskva, 1860), p. 79; Vardan Arewelc'i, 124 (trans. Thomson, p. 204).

34 諸州の君子、貴族や貴族の子たち、有力者、君侯: *sepuhk'*, *zazatk' ew zordis azatac'*, *zmecamecac' ew znaxararac' yamenayn gawarac'*. *Sepuh*は本来ナハラル一族の家長以外の成員(即ち「王子」)を指した。*Azat*は下級貴族を意味するが、貴族一般を指すこともあり得た。キリキア・アルメニアにおいて西欧の文化と接触した際には「騎士」に対応する語と見なされた。*Naxarar*は*azat*に対し、上級の貴族を指す。しかし以上の説明はアルシャク朝時代のものであるため、ここではより緩やかに使われている可能性もある。C. Toumanoff, *Studies in Christian Caucasian History* (Washington, D. C., 1963), 123-127; N. G. Garsoïan, 'The Arsakuni Dynasty (A.D. 12- [180?] -428)', in *The Armenian People from Ancient to Modern Times*, vol. I, pp. 76-79; Eadem, *The Epic Histories*, pp. 512-513.

君侯アルズもまた、見目において美しく、体格は背が高く、力にも優れていたからである。

神のひとり子は、彼が我々にとって、極めて榮譽ある誇りであることを示した。なぜなら彼に、彼のアルツルニ家の父祖と同じように、恩寵を与えたからである。彼は、神に与えられた難攻不落のアミウクの城塞とともに不敗の力を強めた。彼はきわめて学識のある賢明さにより、皆との平和を追求した。そうすることで、彼と彼自身の人々の命が、波の立つような不安の混乱から、平穏となるように。

彼の平和の時代、すべての国々は乱され、とりわけヴァスプラカン地域は平穏ではなく、ますます疑念による不穏で混迷していたが、神の右手は彼と彼の城塞を守り給うた。かのヨセフがエジプトの飢饉の際に諸国に食料を供給したように、彼もまたヴァスプラカン家の確立の立役者となったのである。

彼は飢えた者にとってはパンであった。

[MH306]逃げる者にとっては避難所であった。

彼は捕らわれたものにとっては解放であり、全ての顔にとって全ての涙を洗うものであった。

彼は見るもの全てにとって好ましく、見ていない者にとっては望まれるものであった。

彼の名は地の果から果てまで称えられ、全ての言葉で称賛された。

彼は信仰の土台であり、神聖なる教会の誇りの冠であり、神を敬うもの全ての母であった。

彼は祈祷と祈願において人に優れており、国の救済を願った。乱されることはなく、群衆の中でも落ち着いた者の一人のようであった。

彼は盗賊や略奪者にとっては撃退者であり、全ての不信心にとっては追跡者であった。

彼は顔には汗を、手には労苦を絶やさなかった。

彼はこの歴史家トヴマの書物を手に入れ、再び刷新させた。彼と、彼の良き両親と、神の与えた彼のもうけたヘデネクの記憶のために。なぜならば、正義の果実からは良き木が育つからである。

彼は光を放つ花と果実により、全てのものに望ましくあった。なぜならば、彼の優雅な美しさは明けの明星のようだったからである。あるいは、それぞれ色とりどりの美しさを見せる、春の香り立つバラのようだったからである。[T381]彼の記憶が祝福とともにあらんことを。聖人たちの祈りが彼にあらんことを。アーメン<sup>35</sup>。

【付記】本稿はJSPS科研費22K13229の支援を受けている。

---

35 ここからは既にアルズ＝ステパノスが死去していることがうかがわれる。写本はヘデネクの代に作成されたのだろう。Thomson, *History of the House of Artsrunik*, p. 381 n. 2.